

5 大学間交流と百年の歴史

日本女子大学 学務部長 西山 力也

1901年創立の本学は、今年百周年を迎えました。嬉しいことに、2001年、新世紀の第1歩という記念すべき年が本学の新たな出発となったわけですが、本年4月よりスタートした5大学間単位互換制度はその一端を示すものと言ってよいでしょう。女子大としての長い伝統があるだけに、共学校との大規模な学生交流については学内に反対論・慎重論も多く、協定締結に漕ぎつけるまでに激しい議論を戦わさなければなりません。しかし、その議論は囂らずも「女子大学」の存在意義、また「女子を人間として教育する」を第一義として人格主義的教育を旨とする創立者の理念を再確認する結果となりました。

時代の要請する大学のオープン化は、女子高等教育のリーダーとしてつねに時代を先取りしてきた本学にとって特に新しいものではありません。創立時より、様々な年代の学生・留学生の受け入れ、通信教育の礎ともいえる女子大講義の発行など、輝かしい歴史を持っています。しかし、一般に「女子大学は閉鎖的だ」という印象をもた

れているのも否めない事実です。むしろ、この印象の払拭にもつながることを願ってはいますが、この5大学間交流の真の目的は、広く世界に本学の魅力をアピールすること、と同時に多くの学生に異なる文化空間を体験させ、枠を越えて広く知の情報や切磋琢磨する仲間を求めさせることにあります。

この協定を結ぶにあたって一番大きな推進力となったのは、宮本美沙子前学長が述べたように、「家政学は生活を総合的に科学する学問である。経済原理ではなく生活原理に基づいて社会をとらえ直すことである」という、本学家政学部の確固とした理念でありました。男女共同参画の社会へ向かって進展している今日、この学問を女子大の枠内だけに秘蔵しておく手はありません。広く社会に開放し、かつてのようなあらかじめ決められた両性の役割分担という意識を払拭し、男子学生も女子大学で学ぶことができる時代になったのです。とは言い、女子大がおかれている状況はきびしく、長い伝統と実績を誇る本学も例外ではありません

ん。少子化という問題に加えて、受験生の女子大離れ・共学志向があるからです。しかし、本年度入学者は昨年比200名増、その原因を調査したところ、3分の1以上の新入学生が本学を選んだ理由として5大学間交流制度を第1に挙げたのです。制度導入の成功を喜ぶ一方、他大学への憧れの中に共学志向があることを見せ付けられた思いがありました。

2年次以上の学生が自大学の登録に先立って、バーチャル事務局（通称f-Campus）でネット登録申請をしますが、応募者多数のため多くの抽選科目が各大学にでました。協定の目的でもある各大学が単独ではカバーしきれない領域を補完しあうという意味での科目ばかりが提供されているわけではありません。同じ分野の科目も提供されており、当然競合という側面が生じてくるわけですが、これは教員にもよい意味での刺激を生み、授業の活性化につながります。教員も他大学の学生を教えることにより緊張感がでてきます。本学では、授業中の私語の多さを他大学の受講生から指摘され、改善に向けて努力しています。これからも積極的な批判を寄せていただき、学生・教職員全員の意識の改革に役立てたいと考えております。

このf-Campus事務局の開設には、早稲田大学の大きな寄与があるわけですが、それぞれ異なった事務システムを持つ5大学を一つのシステムにまとめるのに際して、各大学の事務担当者

の膨大な作業がありました。自大学事務をどうf-Campus事務にのせるか、またその逆か。種々の問題解決の過程は自然に各大学事務システムのオープン化となっていきました。f-Campus事務構築は、本学の教務事務の改善の方向を示唆するような点もあり、学内事務改革の一助ともなっています。

このように、協定締結、単位互換実施、f-Campus事務局開設にいたる過程を振り返ってみますと、①女子大の閉鎖性というマイナスイメージの打破を徹底すること、②学生に違った校風の大学でも学ぶ可能性を提供すること、③少子化、女子大離れというきびしい現実の到来を前にして、将来受験生・学生を安定的に確保するためは大学連携が大きな役割を果たすこと、という3点において、本学が当初の目的以上の成果をあげたという手応えを、この制度導入の準備段階から携わっている者として感じております。

各参加大学の積極的な協力と協調により、今後この制度がより充実し、大学間交流の理想形にまで成長・発展することを期待しております。